

令和5年度第1回
東京都総合教育会議議事録

日時：令和5年10月12日（木）11：09～12：03

場所：都庁第一本庁舎42階特別会議室C・D

○浜教育長 ただいまから令和5年度第1回東京都総合教育会議を開会いたします。

本日、宮原委員はオンラインで御参加されます。よろしくお願いいたします。

本日は、朝日新聞社ほか8社からの取材と1名の傍聴の申込みがございました。許可してもよろしゅうございましょうか。

(「はい」の声あり)

○浜教育長 ありがとうございます。では、入室を許可いたします。入室してください。

(報道関係入室)

○浜教育長 プレス・傍聴の皆様には、あらかじめ控室でお伝えいたしましたとおり、傍聴要領に示されたルールにのっとり御参加くださいますようお願いいたします。

それでは、開催に当たりまして小池知事より御挨拶を頂戴したいと存じます。

○小池知事 皆様、おはようございます。10月半ばになりましてようやく秋めいてまいりました。今日は東京都総合教育会議ということで新しいメンバーの方もおられます。これから始めることとしたいと思います。

まず、教育委員の皆様方には日頃から東京の教育の充実に多大なる御尽力を賜っておりますことに感謝申し上げます。そして、宮原委員は今日はドイツからリモートでの御参加よろしくをお願いいたします。今ドイツは何時ですか。

○宮原委員 朝の4時です。

○小池知事 ありがとうございます。

そして、高橋委員は教育委員として初めて今日この総合教育会議に御参加いただくこととなりました。どうぞよろしくをお願いいたします。

さて、都は教育も含めて今年の7月、「未来の東京」の実現に向けました重点政策2023を策定いたしております。その中には3つのポイントがございまして、1つが「人が輝く」、そして「国際競争力の強化」が2つ目、3つ目が「安全安心の確保」、この3点になっております。トップが「人が輝く」という点でございます。また、子供政策連携室を中心にいたしまして、子供目線に立ちましたチルドレンファーストの政策を総合的に推進しているところでございます。昨今は不登校が増加をしているという報道、今朝もちょうど拝読したばかりでございますけれども、様々な困難を抱える子供たちが個性、そして強みを伸ばして人生の中で大きな花を咲かせてほしいと考えておりますが、そのために最適な学びはどうか、きめ細かいサポートがどうか、これまで以上に重要なこととなっております。

今日は、都立高校、チャレンジスクールの卒業生の方に講師としておいでいただいております。

す。あちらにお座りいただいております、吉祥寺二葉栄養調理専門職学校に現在お勤めでいらっしゃる木下結加里さんでいらっしゃいます。これまで御自身の経験で実際に感じてきたことをぜひ率直にお聞かせいただければと思います。

そして、いつの時代も未来を切り開くのはテクノロジーというよりは何よりも人であります。そして、子供たちこそ未来そのものでございます。無限の可能性を引き出して全ての子供が自分らしく、そして健やかに成長できるよう皆様方から忌憚きたんのない御意見をお願い申し上げたいと思います。

冒頭の御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

○浜教育長 ありがとうございます。講師の木下結加里さん、本日はどうぞよろしく願いいたします。

それでは、まず初めに、本日のテーマであります「様々な困難を抱える子供たちへの支援の充実」に関しまして、現状や東京都教育委員会の取組につきまして私から御説明をさせていただきます。

現在、ポストコロナの転換点を迎えて都内にも多くの外国人旅行者の姿を目にするようになりました。社会は本格的に動き始めました。こうした明るい兆しを力強い成長のうねりへと育て上げ、持続可能な未来への歩みを加速させるときが来ています。一方、急速に進む少子高齢化や人口減少、日本の国際競争力の低下など、我が国が抱えている構造的な課題も浮き彫りとなっています。

こうした厳しい状況の中、「未来の東京」戦略では、目指す 2040 年代の東京の姿として、誰もが学び、成長する機会を持つことや一人一人が自分らしく生き生きと活躍できること、不安や悩みを抱える子供・若者等が悩みを共有し、社会とのつながりを保っていることなどを描いています。次世代を担う子供たちに輝く未来を継承していくために、都市が発展する力の源泉である人への様々な支援を展開していくことが必要です。

子供を取り巻く困難について主なものを何点か御紹介しますと、まずいじめにつきましては、その認知件数は増加しており、その対応も様々となっています。児童虐待につきましては、相談対応件数は令和 4 年度には過去最多となっています。小中高生の自殺者数も増加傾向にあります。特別支援教室の利用者が増加しているほか、日本語指導が必要な児童生徒も増えている傾向があります。さらに、いわゆるヤングケアラーと言われる本来大人が担うと想定されている家事や家族の世話を日常的に行っている子供も存在しています。

こうした状況の中、不登校の小中学生数は過去最多となっています。不登校のきっかけは対

人関係によるものや体の不調など様々であり、また、右側のグラフにありますとおり、学校などと全く関わりを持っていない子供が約500人存在しています。子供が抱える困難等が不登校という状況に表出しているとも言える現状があることから、学校とのつながりが全くない子供をなくし、学校とのつながりを端緒に一人一人の状況に応じた支援を強化することが必要であると考えています。

これらの子供の抱える課題は心理や福祉等の専門家と連携して対応する必要があることから、子供が抱える困難等に学校だけで対応するには限界があることも考えなければなりません。学校の教職員は現在も子供が抱える様々な困難に対応していますが、教員の勤務の現状として、時間外勤務が月45時間を超える者の割合が例えば中学校では5割を超えているという状況もあります。子供たちのためにも教職員の適切な働き方という観点からも、学校と様々な関係機関が協働して支援する体制の充実が必要です。

これらを踏まえまして東京都教育委員会は様々な取組を行っていますが、ここではその中から3点御紹介いたします。

第1はスクールソーシャルワーカーなどの活用支援です。子供が抱える様々な課題を解決に導くためには、家庭や生活環境の改善に向けて教育と福祉をつないで援助するスクールソーシャルワーカーの役割が重要であることから、区市町村や学校におけるスクールソーシャルワーカーの活用を促進しています。

第2はバーチャル・ラーニング・プラットフォームの提供です。これは、不登校の子供や日本語指導が必要な子供への学習支援、進路相談などを仮想空間で行うものです。令和4年度からのデモ運用を踏まえまして実施を8自治体に拡大するとともに、学校生活に困難を抱える都立高校生などへの支援も行っています。

第3はチャレンジスクールなどの充実です。小中学校時代に不登校経験がある生徒や長期欠席などが原因で高等学校を中途退学した生徒が自分の目標を見付け、挑戦するための学校であるチャレンジスクール、自分のライフスタイルや学習ペースに合わせて学べる昼夜間定時制高校などを設置し、多様な学びを支援しています。令和7年4月には7校目のチャレンジスクールを立川市内に開校する予定です。これらの取組は、庁内の子供政策に関わる部署はもとより、区市町村、関係機関等と連携し進めています。

以上を踏まえまして、本日は学校とのつながりが全くない子供をなくし、一人一人の状況に応じた支援を強化するためにそもそもどのような課題があるのか、そして、今後こういった方向性を目指す必要があるのかについて御意見を頂きたいと考えています。

画面に協議の視点の例として、人材の活用、アセスメントの充実、ICT の活用などなど御覧の6点をお示しいたしました。参考にしていただけましたら幸いです。

本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

それでは続きまして、様々な困難を抱える子供たちの現状、必要な支援に確実につなげる上での課題について木下様からお話を伺いたと思います。木下様、どうぞよろしくお願いいたします。

○木下氏 御紹介にあずかりました吉祥寺二葉栄養調理専門職学校から参りました管理栄養士の木下結加里と申します。本日はよろしく願いいたします。

私は、現在、専門学校で教員の補助や調理実習等の準備を行う助手という仕事をしております。私は吉祥寺二葉栄養調理専門職学校の管理栄養士科を卒業しています。現在は後輩の学生たちの育成に日々努めております。

このような日々を現在は送っておりますが、私はチャレンジスクールの卒業生でもあります。私は小学校3年生頃から学校に行きづらくなり、残りの小学校生活は保健室で過ごしました。当時の私は周りに迷惑をかけていることは理解していましたが、同時に、自分のことを分かってもらえない、ほかの同年代の子たちができていることができない劣等感を感じていました。

その後、中学校では特別支援学級に進級しました。最初の転機となったのは中学校2年生のときに異動してきた先生により、週に1度のペースで特別支援学級がある教室で調理実習を行うようになったことだと思います。私が料理を好きだったということもありますが、その調理実習で自分が考えたレシピが採用され、実際に学校で作ったことは自分にも得意なことがあると自信につながりました。この経験から週に何日かは中学校に行くようになりました。

そんな中でチャレンジスクールに進学しようと思った理由が3点あります。1点目に、学力考査や内申書がなくても入試が受けられること。2点目に、3部制、定時制、単位制で自分に合った時間に学校に通えること。3点目に、自分と同じ不登校を経験している人が多く進学していること。この3点です。この上で稔ヶ丘高等学校を選択した理由は、落ち着いた校風と基礎学力向上に力を入れていたところからです。しかし、この学校に通いたいと強く思ったきっかけは、中学3年生のときに訪れた稔ヶ丘高等学校の文化祭で生徒が生き生きと楽しそうに模擬店や催し物を行っているのを見て、私もこれがしたいと思ったからなのを今でも鮮明に覚えています。

その気持ちを抱えながら私は稔ヶ丘高等学校に入学しました。そして、高校1年生、2年生と文化祭の実行委員を行うことができ、やりたいことを行う楽しさを経験しました。しかし、

1年生の秋頃から休みがちになってしまい、半年ほど高校に通わない時期もありました。それでも高校は卒業したいという思いがあり、2年生からまた高校に通うようになりました。その後は欠席する日もありましたが、1週間全く学校に行けないという日はなくなりました。

また、私は4年間稔ヶ丘高等学校に在籍しておりましたので文化祭も4回行っております。自分たちで考えたメニューを販売した年や喫茶店などを行った年もありました。文化祭を行う中での学びは今の私にとってもかけがえのないものです。同年代の人たちと協力し、1つのことを行う。自分たちで作ったものを販売する。知らない人に接客を行ったり準備を行うのも、人と話すのが苦手であった当時の私からすればとても大変なことでした。だからこそ、準備が終わったときや文化祭が終わったときの達成感は、私でもできるという自信につながりました。

学校に通えるようになった理由として考えられるのは、稔ヶ丘高等学校の自由に自分の興味のある教科を学び、時間割を組めるところや自分のクラスの教室が決められていないなどの自由なところが私と相性がよかったのだと思っています。そして、私と同じように不登校を経験した生徒が多く、誰もが悩みを抱え、苦難を抱えていると知り、困難だと感じていたのが自分1人だけではないと思えたからだと思います。また、稔ヶ丘高等学校の方針には「自他のチャレンジを尊重する」というものがあります。これにより自分のペースで勉学も交友関係も進めることができ、卒業年次も3年生とするのか、4年生とするのか、自分自身で選択することができたのもよかったのだと思います。

高校からの進学を考えたとき、初めは大学に進学したいと思っていました。しかし、自分が働く姿を思い浮かべたときに、ただ大学に進学しただけでは自分が仕事をしている姿を想像できないことに気が付きました。そこで、資格が取れる分野に進みたいと考え直し、子供の頃から好きだった料理や食に携われる職業として管理栄養士の道に進むことを決意しました。この時点では管理栄養士資格が取得できる大学に進学するか、専門学校に進学するか迷いがありました。私にとって大学の魅力は、稔ヶ丘高等学校のように自分で好きに時間割を組むことができ、クラス等の密な関わり合いがないところだと思っていました。しかし、苦手であった毎日決められた時間に学校に通うことを経験しないままで働けるのかという不安もありました。そこで、苦手だからこそ社会に出る前の最後の学びの場として苦手なことにも挑戦したいと考え、吉祥寺二葉栄養調理専門職学校に入学しました。専門学校での日々は専門性が高く大変だなと感じることも多くありました。ですが、社会に出ても困らないだけの知識と技術とチームワークが学べたと実感しています。

これまでの経験から、私が困難を乗り越えられたのは、中学校の特別支援学級や高校のチャ

レンジスクール、専門学校といった、自分がいてもよいと思え、受け入れてくれる居場所と出会えたこと、そして、その場所で私を1人の人として真剣に向き合ってくださった先生方のおかげだと思っています。今思えば、私にとって居場所とは、1人の人として向き合ってくれる人、真剣に話を聞いてくれる人、普通に接してくれる人がいる場所でした。これは多くの人が普通に思っていることなのかもしれません。ですが、一度居場所がないことに気付いてしまうと、社会と分断され、二度と関われないのではないかと不安がございいます。誰しも居場所は必要なものだと私は考えています。

私がこれからの学校に期待することは、今の児童生徒の声に耳を傾け、変わっていける柔軟性を持ち続けていただくことです。稔ヶ丘高等学校は私が卒業してから授業の選択肢がより自由になりました。そのほかにも変わったことは多くあると思います。変わった直後は戸惑いもあったと思いますが、卒業生の私から見ても今の稔ヶ丘高等学校は誇れるすてきな高校です。

そして、私が料理という好きなことを続けられたように、多くの子供たちが自分の「好き」を見付けられる居場所に学校がなっていければうれしいです。また、私は高校に片道1時間半以上かけて通学しておりました。チャレンジスクールは東京23区には多くありますが、多摩地域には現在まだありません。先ほどもお伺いしたとおり、令和7年度に1校目設立予定となっておりますが、さらに2校目などチャレンジスクールの選択肢の幅が今後も増えていくことを願っています。

最後に、困難を抱えている子供たちへメッセージを送らせていただきたいと思います。今あなたの周りで「悩み事があるのでしょうか？ 何に困っているの？」と聞かれたり、「1人で悩まないで相談してね」と言われることがあると思います。私は急いで無理に相談しなくてもよいと思っています。自分が何に困っていて、本当は何に悩んでいるのか、理由は1つではなく、いろいろあり、簡単ではないから困難になっているのではないのでしょうか。ゆっくり自分のペースで、何に困っているのか、何に嫌だと感じているのか考え、自分が話したいときに話したいと思った人に話してみてください。もしかしたらそんなことをしても誰にも理解してもらえない、こんな相談をしてどう思われるんだろうと思うかもしれませんが。私は、しっかり自分で考えた理由は、全ての人に理解されなくても、必ず理解して受け入れてくれる人があなたの近くにいると思います。焦らずゆっくり自分のペースで進んでいってほしいです。

以上です。

○浜教育長 ありがとうございます。木下様から、これまでの経験を踏まえて様々な困難を抱える子供たちの現状などについてお話を頂きました。大変有意義なお話を頂いたと思います。

続きまして、今のお話も踏まえまして協議に入りたいと存じます。本日のテーマ「様々な困難を抱える子供たちへの学校を起点とした支援の在り方」について協議をしてみたいと思います。木下様への御質問などもございましたら併せてお願いをいたします。

初めに、どのような課題があるのかについて御発言を順にお願いしたいと思います。恐れ入ります。議事の進行上、こちらから順番に御指名をさせていただきます。初めに、山口委員、お願いできますでしょうか。

○山口委員 木下さん、御発表ありがとうございました。緊張されましたよね。伝わってきました。でも、御自身の経験を交えて、私たちが気付いているというか、きっとそうなのではないかなと思っていることが本当に木下さんの実体験を通して語られたことは大変勉強になりました。中でも、学校に行けない時期に自分が迷惑をかけているんじゃないか、そういった劣等感を抱えていらしかったこと、そして、学校に行けるようになったきっかけがやはり好きなことに巡り合ったこと、そして自分でもやれることが見付かったという、それが1つ前に進めるきっかけになったということですね。そして、居場所について、私たちはいつも学校であったり、大人たちが、子供たちが自由に伸び伸びと学べる、そして前に進める居場所を提供しようと思っはいるのですけれども、それがなかなかうまくいっていないということも事実なのだなどいうのを感じさせていただきました。大変参考になりました。

その上で、私は、不登校と言われてはいますが、学校に行けない子供たちの数は先ほどもお示しいただいたように年々増加傾向にあります。そして、この傾向は、子供たちが置かれている多様化している、あるいは複雑化している環境を考えますと、これからますます増えていくのではないかとということも予想されます。そういった子供たちを学校と結び付けて、木下さんが乗り越えられたのも、学校で先生たちと接し、そして好きなことに出会ったということが大きいと思うので、そこをどう手当てしていくかということが求められると思っています。

その上で、やはりコロナ禍で私たちは、ICTを使った授業ですとか学校との関わり、先生との関わりを実証してきた経験があります。不登校というと、学校に行けなくなって、それが自分でも、今日だけなのか、明日だけなのか、どこまで続くのか、その始まりのところが捉えてつながりを切らない。そのためには、今日は学校に来られないけれども、心の不調であっても体の不調であってもつながれるようなICTを使ったオンラインのつながりをもっと私は積極的に進めていく必要があるのではないかなというのを感じております。

やはり先生方の多忙化ということもありまして、子供たちに居場所を提供する、そして何を迷っているのか聞きたいのだけれども、なかなか一人一人に向き合う時間が正直ないというの

もあると思うのです。ですから、まずはつながりを保つためにもオンラインをもっと東京都は積極的につなげていくということが必要なのかなと感じました。

○浜教育長 ありがとうございます。

続きまして、宮原委員、お願いいたします。

○宮原委員 木下さん、すみません、本日は画面越しに大変失礼いたします。御自身の経験をほかの方に語るのはなかなか難しいことだったと思いますけれども、率直に語っていただきまして、ありがとうございました。私も大変勉強になりました。特に学校に行けなくなった時期にどういうことを考えておられて、どういうことがきっかけで少しずつそれを乗り越えてこられたかという御経験はなかなか伺えることではないので、本当に貴重なお話を伺うことができました。ありがとうございます。

その上で、私は、木下さんのように様々異なる事情を抱えている児童生徒に対して、もちろん都教委としては、これまでも先ほど御紹介がありましたように、スクールカウンセラー、ソーシャルワーカー、支援員の設置、チャレンジスクールの設置あるいはバーチャルプラットフォームの試みなど、解決のための選択肢を提供はしてまいりましたものの、まだ急速に変化する社会の事情に対してなかなか追いついていない現状があるのかもしれないと感じました。私どもとしてもよりスピーディーに、かつ柔軟に対応する、いわゆるアジリティーというものが都教委の方にも教職員の方にも求められているのだなということを強く感じた次第です。

その上で、子供一人一人の個性を踏まえた個別の対応ということについては、本日特別支援学級のお話をさせていただきましたけれども、そういった学校や定時制の方が教職員の意識も含めて対応力があるのだなということも昨今感じております。一方、全日制や普通科の児童生徒も恐らくほとんど同じようにそれぞれ個性が強く異なっており、そういったことを踏まえた教職員自身の対応力も変えていかなければいけないと感じております。

したがって、教職員はどうしても御自身の経験や知見にとらわれて幾つかの型を考えておられる方も多いかもかもしれませんけれども、やはりそういったことにとらわれない柔軟な対応力、アジリティーと、スクールカウンセラーやソーシャルワーカーなど専門家を活用しながらチームで個々の生徒児童の問題に、あるいは困難に対応していくというチームのマネジメント力が必要になってくるのではないかなと思って伺ってございました。ありがとうございます。

○浜教育長 ありがとうございます。

では続きまして、高橋委員、お願いいたします。

○高橋委員 木下さん、大変すばらしいお話をありがとうございました。お話を伺っておりま

してたくさんの方が私自身心に止まったことなのですが、今の生活が本当に充実していて、今の職場、多分校長先生とか良いスタッフの方に囲まれてすごく準備も頂いたのではないのかなど。本当にすてきなお話をありがとうございました。

それらを踏まえまして、私から今日のお題に沿ったコメントさせていただきたいと思っております。特に一人一人の状況という部分に焦点を当てますと、世の中全体が学校に限らず多様な人々の多様なニーズを受け止めようとあらゆる分野の方々が努力していて、これは学校も例外ではないのだと考えております。加えて、現状の多様な子供たちの増加、もともとそういう方がたくさんいらっしゃったのかもしれませんが、このところのいろいろな技術というか、いろいろな物の考え方の進展でますます増加している状況を鑑みれば、今後ますます教育の個別化・個性化、学校もこういったことに対応していかなくてはならないのではないかと非常に強く感じたところでございます。

その一方で、コロナ禍で多くの子供たちが在宅学習を経験したり、その際にデジタルのドリルであるとか、動画とかいう ICT を活用した学習の発展によって、私の娘もそうですが、登校して学習していくことの意義について改めて問い直しが起こっているのではないのかなと思っております。

先ほどの木下さんのお話をお借りすれば、居場所ということが非常にキーワードで、まだまだそういった ICT の技術だけでは居場所づくりは困難だと思いますので、学習のみならず、そういった多様な子供たちをどう受け止めていくのかということを考えていくということが課題ではないかと考えたところです。

私からは以上です。

○浜教育長 ありがとうございます。

では、秋山委員、お願いいたします。

○秋山委員 木下様、ありがとうございました。また、子供たちへのメッセージ、しっかり子供たちに届くと思います。ありがとうございました。

それでは、私が日々感じている課題を申し上げたいと思います。不登校の増加に伴い学校とのつながりが全くない子供が 500 人も存在するという現状が報告されましたが、関わりがあってもなかなか改善に結び付かないケースも増えていると思います。不登校のきっかけとして対人関係以外にも身体の不調が多く回答されている現状には、子供たちの状況を身体面、心理面、社会面のバイオ・サイコ・ソーシャルの視点でアセスメントする必要があると思っています。

しかし、学校においてはサイコソーシャルの面からの実態把握や支援は十分にできていない

という課題があります。アセスメントやカウンセリングによる心理面の把握は、スクールカウンセラーの勤務日数不足や発達検査の需要と供給の不一致から子供たち全員について実施できているわけではありません。また、社会面については、学校では子供たちの家庭環境や家族構成などの個人情報是最小限しか知ることができず、教員と家庭との関わりも希薄になっています。このことはヤングケアラーの支援や虐待の発見を難しくしているとも考えられます。

一方で、実態を知れたとしても、これらの支援を全て教員が担う現状は限界があり、時間外勤務を増加させる要因にもなります。学校の組織体制の強化、対応の核となる教員の配置といっても、役割だけ与えて通常の業務をこれまでどおりさせるのであれば、仕事を増やすだけで、かえって働き方改革を逆行させることになってしまいます。特別支援教室の在籍日数も右肩上がりに増加しています。これは、発達に課題のある子供が増えていることと、また、発達障害への理解が進み、保護者のニーズが高まってきていることが要因だと考えられますが、教員の定数は年度当初の児童生徒数によって決まるため、年度途中の入室に対応し切れていない現場があります。この教員定数管理も是正する必要はないでしょうか。一人一人の状況に応じた支援を強化するためには、こうした状況を改善すべく、実態把握や支援を学校教員以外の人材を活用することが必要だと考えています。

○浜教育長 ありがとうございます。

では、北村委員、お願いいたします。

○北村委員 木下さん、どうもありがとうございました。御自身の恐らく真っすぐではない、いろいろな思いで今までされてきたことがとてもよく伝わるお話で、特に印象に残ったのが、自分を見詰めて自分のペースで歩く、それをまた可能にしてくれた学校の柔軟な仕組み、そういったものが非常に印象に残ったのですけれども、それを経験した木下さんが今教育の場に携わられているということに僕自身は非常に感銘を受けました。学ぶことがつらかった時期もあったと思うのですけれども、その学びを通してやはり自分の道が開けた。それを今度は次の子供たちにお感じになられているのかなと想像しました。どうもありがとうございました。

そういったことを考えた上で、やはり自分たちがどうやって一人一人の子供のペースを大切にしてあげられるか、それを考えることが非常に大事だなということを感じております。学校に行けない理由は本当に一人一人異なる。でも、それに先生方が全て対応できるのか、それも現実的ではないと思います。やはり学校にできること、できないことをしっかり整理して、どこまで学校でやるのか、そして学校以外で何をしなければいけないのか、これはもう東京都全体で是非考えなければいけない問題だと思っていますし、これは地域、家庭、そういったもの

を含めてみんなで自分たちの問題として考えていく必要があるなど。

先ほど知事も今朝の報道でも非常に多くの過去最高の数の子供たちが学校に行けないということをおっしゃっていましたが、そのニュースを見たときに多くの都民が自分にも関係あるんだと思ってくれたか、自分の子供は何とか学校に行って自分事ではなくなってしまうという都民の方もたくさんいらっしゃるのかなど。でも、実は自分の子供ももしかするとそういう可能性があったかもしれない。そんなことを常にみんなで自分事として思いながら、教育分野だけではなくて、福祉、そして地域のまちおこしの活性化なども含めていろいろなことを考えるときに、そこに子供たちを、正に先ほどおっしゃったようなチルドレンファーストで子供を真ん中に置いてまちづくりを考える中でどうやって学校に行けない子供たちもそこに参加してもらえるのか、そういったいろいろなステークホルダーが協力し合っていくようなことをこの東京で考えていきたいなと感じております。

○浜教育長 ありがとうございます。

皆様から教員と家庭の関わりの希薄化、多様性を受け入れる教室づくり、また、現在の学校の果たすべき役割などなど貴重なお話を頂けたところでございます。

この後は課題の解決に向けた今後の取組の方向性についてまた順に御意見を伺いたいと思います。大変恐縮ですが、時間の関係もございますので、1～2分程度でおまとめいただければ幸いです。

では、今度は逆回りで北村委員からお願いいたします。

○北村委員 ありがとうございます。東京都は、バーチャルプラットフォームやチャレンジスクール、非常に先進的な取組をやっていると思いますが、正にこれをさらに発展させていくこと、まずはそれが一番大事なことではないかなと感じております。その上で、不登校という問題はネガティブなことばかりで捉えるのではなくて、いかにポジティブに変えていくか。例えばこれからの社会、学歴とか学校歴にとらわれない、むしろ学習歴、本質的に何を学んできたのか、そういった学習歴が重要になってくる社会になってくると思うのです。そういう中で、学校に行ったから、学校に行って卒業証書もらったからおしまいではなくて、何を本当に学んだのか、その意味では学校に行っても行かなくても学べる仕組みがやはり非常に大事ですし、ただ、これを少し、例えば公的に認証したりとか、どういう学習歴を積んできたかということその後その人がきちんと自分の人生に活かしていけるような仕組みももしかすると必要かもなど。

大学の話になりますけれども、最近MOOCsというオンライン授業、そこで取った単位を大学

が認めるなんていうことも出てきたり、新しい動きはこれからますますあるのではないかと思いますので、そういったことも含めて考えていけたらいいなと思っております。

○浜教育長 ありがとうございます。

秋山委員、お願いいたします。

○秋山委員 課題の中で触れましたように、学校教員以外の人材活用を積極的に図っていく必要があると思います。現在、都のスクールカウンセラーは週1日配置の学校が多く、学校によっては相談の予約がいっぱいで、子供の日常の様子を把握する時間がないという声もあります。学校配置日数を増やして、できれば常勤とするぐらいの取組が必要だと思います。不登校や登校渋り、また別室登校などの対応は、管理職や養護教諭、空き時間の教員が交代をされていて継続的に支援ができる体制にはなっていません。先ほど講師の木下様も居場所と出会えて困難を乗り越えられたという話をされていましたが、学校にこのような居場所を作るにはスクールカウンセラー以外に継続的に登校支援指導員や支援員などの配置も必要になります。

不登校の要因には家庭環境の課題や発達の課題も多く見られます。取組提案の福祉との連携強化をさらに進めて、医療・福祉との連携強化が今後は重要になってくると思います。校医によるこれまでのような学校健診だけではなく、思春期健診のような、子供たちの身体面・心理面の支援を専門の人材が進めて学校と連携する必要があります。また、福祉面ではスクールソーシャルワーカーの配置も不十分で、人材も定着しないため、機能しているとはまだまだ言えません。スクールソーシャルワーカーの活用について、良い人材が機能するよう、より積極的な支援が必要だと思います。

○浜教育長 ありがとうございます。

高橋委員、お願いいたします。

○高橋委員 人が輝くという観点で考えれば、まず普通があって、それ以外を抽出して特別な支援を行っていくという考え方にはいずれ限界が訪れるだろうと思っております。全ての子供一人一人がそもそも特別な存在であるということを前提に学校経営やそのような関わりを我々がしていくということが重要ではないかと思っております。その際に、私は1つ、専門でもありますのでICTは非常に重要だと思っております。今のもう1段、2段、少し実質的に発展したICTの活用を上手にしていくと、非常にコミュニケーションが最大化している、これまでにないコミュニケーションができているなど感じております。子供同士がアイデアを交換したり、子供同士が悩みを相談したりするようなコミュニケーションももちろんありますし、先生のアイデアがいろいろ発展していったって地域の人にこだましていくとか、関係機関の方の助言が学校

の中に入っていくとか、このようなコミュニケーションの最大化みたいなことでいろいろな課題が解決できていくのではないのかと少し思っているところでございます。

私からは以上です。

○浜教育長 ありがとうございます。

宮原委員、お願いいたします。

○宮原委員 重なるところは飛ばしまして、私も今委員の皆様がおっしゃったように、個性の異なる児童生徒への目配りということについて、教職員だけに頼らない仕組みが必要だと思っております。先ほど申し上げましたけれども、それぞれ個性が異なり、興味も異なり、得手・不得手も異なるという子供たちを、たとえクラスを 35 人学級にしたにしても、教職員が個々全てに丁寧にフォローするというのは限界のある人数であるとは思いますが、こういったことに対してチームでしっかりと対応できる、誰でもそれぞれの個々の生徒児童の状況を踏まえた上で対応できるような仕組みを体系的に作っていくということが重要だと思います。それにはもちろん ICT の活用も非常に重要だと思っておりますが、一方でそういった対応力、チーム運営力も重要で、そこには教職員の意識改革が必要になってくるのではないかなと思います。もちろんそれぞれの個性に向き合うためには、地域運営組織を機動的に活用するような学校以外の人材をうまく活用していくということも必要ですが、いずれにしても、それをどのように活用するかというスキルの構築についてはまだまだ課題があると思っておりますので、教職員の意識改革とチームやクラス運営のためのスキルの獲得が重要ではないかなと思われました。

○浜教育長 ありがとうございます。

山口委員、お願いいたします。

○山口委員 ありがとうございます。昨今の状況を見ますと、例えば経済格差が広がっていること、それから日本語に難のある子供たちが在籍していること、あるいはヤングケアラー、こういったことの背景、もちろん不登校の理由などは様々ありますけれども、ほとんどの場合は自分でどうにかできない課題、何とかしたいという気持ちはあるのだけれども、子供の力ではどうにもできない課題をそれぞれが抱えているということを私たちはやはりまず認識する必要があるだろうと思います。そして、木下さんのお話もありましたけれども、その子供たちにどう向き合ってどのように導いていけるのかということが求められている中で、やはり私は教員の働き方改革はセットで考えるべきだろうと思います。やはり教員が様々な業務の多忙化によって子供たちと向き合う時間がどうしても少なくなってしまうこと、やはりこのところに焦点を、今も進めていますけれども、そして、皆様からも御意見があったように、ス

クールカウンセラーとかソーシャルワーカーとか、いろいろな方々とそのマネジメントをしっ
かりしてチームで対応していくということをますます進めていかなければいけないと感じまし
た。

○浜教育長 ありがとうございます。

これまでの議論を踏まえまして、小池知事、御発言がございましたらお願いいたします。

○小池知事 様々な分野からの分析、またお考え、御意見を伺わせていただきました。ありが
とうございます。結果としての不登校、そこに至るまでの様々なきっかけ、原因、これはまた
とても多様性があると思います。そういう中で今日は御自分の経験をお話しいただきました木
下さん、ありがとうございます。

そういう中で居場所が欲しいと、それを見付けるきっかけが何であったかとか、実際の御経
験を踏まえて話していただいたわけであります。そうやって居場所も多様化していかなければ
なりませんし、子供のニーズに対しての学びの場である学校も働き方改革の課題もありますし、
教える側も、また、先生、学校におられる方々がそれを受け止めるというのも多様性が求めら
れて、とても複雑な社会を集約させた結果、不登校という3文字につながっているのだという
ことを改めて感じたところでございます。

そういう意味では、子供たちの健やかな成長には、教員も健康で生き生きと働く、そのため
にお話がありましたスクールソーシャルワーカーなどの専門人材、支援員など外部人材の力を
うまく借りるということ、それから、教員の負担を軽減して子供一人一人に合わせたサポート
の充実が必要だ、このように感じたところでございます。

また、木下さんから、今振り返ってみたら、都立高校の話で先生との出会いや調理という自
分の好きな分野を見付けられたことなど、正にチャレンジがあって、都立高校でのチャレンジ
スクールでのお話が居場所を見付けさせてくれたんだというお話がございました。都立高校で
の生活がづらい経験を乗り越えて自分の道を切り開く、そのきっかけの1つになったことをう
れしく思います。

また、チャレンジスクール、多摩の方はないというお話でございましたけれども、令和7年
4月からチャレンジスクールが増えることとなっております、子供たちがそこで自ら伸びて
育つというその一助になるような多様な学びの場をこれからも充実させていきたいと思っ
ております。

また、不登校の背景には、コロナで、オンライン教育でやらざるを得なかった時期があった。
これは両面がある。高橋先生の御専門で、ICT の活用ということのプラスの面と、逆に学校に

行かなくていいんだという経験をみんなでしたということ、両方があろうかと思いますが、それをいかにポジティブな方向に生かしていくのかということも考えていく必要もあるかと思えます。

やはり学校というのは友達と触れ合ったりして、時には友達といろいろなプラス・マイナスな経験があったりして、それがまた後から振り返ってみたら良い学びにつながったりすることもありますよね。そういう意味で、どれぐらいをオンラインというか、ICTに求め、どれぐらいをリアルでつながっていくのか、その辺りも大きな課題であるなど改めて感じたところでございます。

やはりこの東京1,400万人、毎日通勤通学で300万人という都市でございますけれども、やはり一人一人がいろいろな多様性を持つ中で居場所を見付けやすくすると、そのことがチルドレンファーストを進める中で大きなコンセプトだということを改めて感じたところでございます。いろいろな分野の切り口から御協議いただいたことに感謝申し上げたいと思えます。ありがとうございました。

○浜教育長 ありがとうございました。

ほかにもまだ御意見を頂きたいところでございますが、時間の関係もございまして、意見交換はここまでとさせていただきます。今日のお話も踏まえまして、東京都教育委員会としてこれからの施策の充実、推進を図ってまいりたいと思えますので、引き続き御指導よろしく願いいたします。

最後に、本日話題に上りました不登校の児童生徒への支援に関連して、今年度東京都として組織横断的に取り組んでいる施策等につきまして御報告を申し上げます。

東京都では、「未来の東京」戦略や東京都子ども基本条例などを踏まえましてチルドレンファーストの社会の実現に向けた様々な取組を推進しています。中でもヤングケアラーや日本語を母語としない子供の支援など、既存の枠組みでは対応が難しい課題に対しては、こども政策連携室が核となって政策分野の垣根を超えて関係部署が連携し取り組んでいるところでございます。ここではそのうちの1つ、今回のテーマと関連が深い学齢期の子育ちに係る取組について御紹介をいたします。

このプロジェクトが立ち上がった背景といたしましては、いわゆる不登校の児童生徒が増加の一途をたどっていることがあります。これまで都では、区市町村とも連携しながら新たな不登校を生まないための取組や不登校の児童生徒を支援する取組を推進しておりますほか、ICTも活用して多様な教育機会を提供してまいりました。その一方で、フリースクール等の民間が

運営している学校外の施設は、このような児童生徒をはじめとした生きづらさを抱えた子供たちのサードプレイスとしてその重要性が増しているという現状もあります。そこで、新たに学齢期の子育ちに関する推進チームを立ち上げ、幅広い視点から誰一人取り残さない多様な学びの場、居場所の創出に向けた検討を行っております。具体的には、フリースクール等に通う子供や運営団体に対するヒアリングに加えまして、国内外の先進事例調査等を通じてニーズや課題を分析するとともに、新たに有識者会議を立ち上げ、その議論も踏まえながら学校外の多様な学びの在り方について検討をしています。

御説明は以上でございます。

それでは、会の締めくくりに、最後に知事から一言いただけますでしょうか。

○小池知事 一言最後御挨拶を改めて申し上げます。

まず、講師を務めてくださいました木下さん、ありがとうございました。そして、木下さんの率直なお話からいろいろ御議論を深めていただきました先生方に感謝申し上げたいと思います。

東京都の教育施策大綱がございます。ここには、「誰一人取り残さず、すべての子供が将来への希望を持って自ら伸び、育つ教育」を目指している。これが大綱でございます。今日御協議いただいた件でございますけれども、心身の健やかな成長に向けたサポートの充実も大綱の重要な事項の1つとなっております。そして、木下さんのお話からも、学校だからこそ学べることがあるのだということを改めて感じたところでございますし、また一方で、学齢期の子育ちなど学校外の学びも選べるようにすることも重要かと思えます。子供たちが学校とのつながりを持ち続けられますように、都の教育委員会の皆様方と連携して学校教育の更なる充実を図ってまいります。また同時に、子供に寄り添った実効性ある取組を政策分野の垣根を超えて練り上げていきたいと思っております。こうした政策を機動的に展開して一人一人の個性、そして能力を最大限に伸ばすことができますよう都を挙げて取り組んでまいりたいと存じます。

今日は本当に皆様、ありがとうございました。宮原さんも朝早くからありがとうございました。木下さん、ありがとうございました。

○浜教育長 ありがとうございました。

本日は「様々な困難を抱える子供たちへの支援の充実」という大変大きなテーマについて、限られた時間ではありましたが、御協議を頂きました。ありがとうございました。また、木下様、貴重なお時間を割いていただきまして、大変有意義なお話を聞かせていただきまして、ありがとうございました。本日の議論を踏まえて、東京都教育委員会としても関係部局と連携して総

力を挙げて取り組んでまいりたいと思いますので、引き続き教育委員会の委員の皆様、御支援をよろしくお願いいたします。

それでは、本日の会議は以上で終了いたします。本日は誠にありがとうございました。